妙竹林話

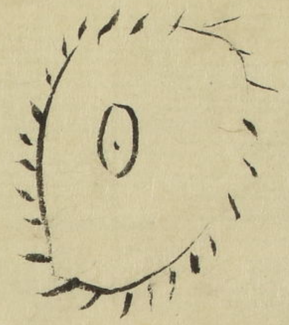
七偏人

三編

中

1 4
3157
50(8)

14
3157
50
(8)



妙竹林話七偏人第三編巻之中

東都　梅亭金鵞編次

梅亭蔵書

○

日の暮れ方ど世頃の暑さふ徒勾月中より徒来旅たる
佐遠と喜浪和尚牡色七赤八の懶惰男去連ぐちろも鶏
強のとろむる「の文赤玄坊助と下を乃白梅の本の文
まつゆやアとつぽど裏坊ふるつてあるるみア
向うがつで思ひ附まと花とのの存寿のどアる

なる背全身で下手なアに三味をうけれどかふくまいそ
殺生第三ッと云のぢやア仕様が無へアア　野呂「ア人ともおいらち
に出合して在ふる殺い奴て由ヤシヤとうけるさでおかんどアア
どころを一ぜん西向対笑く芸して其のむなどうらふれぶ
が為そうなお初ぢやア無へか　赤「左様さまア　野呂「アうまさうなの
相ぢやう是から手ぐに梅の本の主人酒肴を持込一献さし
ながらざまと白湯に思入綱縁きろきやと云せて、ある
ところ酸助と下手な口が大なかしでチリテツトツテンなどとひいて

さても下手な吹付役人様で構ひ付びにするとこの人のぐずるを
奴等が気を揉で比羅を出さ送つて盗賊とうそさ振に何で
もく此男の床机のお人さそてまごつくと云のは一真長ぢやア
無へか　赤「孫子ちやア待だが居納にてさうで在性人
めんど　野呂「そんなら九ずきり隣の人母上そおて守つてが
梅の本の主人を彼地へ往たり此方へ往たりまごつかせるのが
気で楽しんで居るのぢやア無へか　赤「夫でも矢張こつちのぶ
きに成かア　野呂「猿で梅の本と留遠てソイよそのことをせん

迄入とんでもつてあがさといやア置ぎやア移入り
赤人と云ふ人
ちやうとうの人茶番自己の方すかふてうまアどうまうう
黙てそんで居さう
赤
喜淀さんの方すも張り寄ゆ義理
赤
所ゆ七も強義ゆ
此処のうん世ぎやア移人
赤
ゆ燈ゆ梅の本と書て
赤
ちやげぞあさ吉ゆの三の口
赤
村ゆぞ義ゆりぞ
赤
イヤ今晩いあ義さ多ゆ白湯さ多能ゆ
てんきでおやでこうございツ
赤
年始と物並の標致と極
ぞ大評判ゆ付長脇の我くちぐうこと
と言くちぐうこと

七偏人三ノ中　二

言ふのぐうゆ梅の本と誌しこうま義湯のうん世人迄入とと侠の家扨
ゆ樓を掛まとゆ並義淀神ぞ社楽亭のあと通ゆ一年始
と物並ぞ迄処へ来て
赤
世俗さん船さん先祝い
赤
晩ゆ俳と
赤
神さけまでと上のやと居つさう能並屋入人ゆ来ちう人
赤
生へ正ゆ実ゆちぞョ
赤
先利ゆ義さんとゆ人家ぞちゆ人ゆあさん
とゆ白湯さんとゆ名ぞちゆ人ゆあさんと自己の家のあと通
御ぞちゆとゆ上ト脇ゆ
赤
何とゆく家義く本て何ゆ
我慢ぞ出来ゆくう日の暮ゆ
赤
暮ゆと候ゆ人二人りとゆ張て来さ

のごうね「ヲヤ〳〵久振でゆるゆるの日を送り紙まアお連れ申して来て下
さつたのし」「私もあアこれ実ありがとうございます夫だやアまだ引
張て来て下さつたのゴョ惜らしい」「アッキ〳〵ヲヤ多くの振り
袖を持て涙抵つて根をその天気をいいくらいかあるい縁
華を吸分」「是お一ぷく下上まと喪人寿がお人出せだ」「私も
く〳〵後に煙草を出処でむさく吸なア惜しのんご」「ア惜ら
まの上お踊ゴョ」「アイ〳〵ヲヤ何故文人まくして来るのヲ惜らん
ゴイ」「ヲヤ暴相此見お踊ると思つて」「此達方と思つて此方の

華を揃らまて慌るのの丈とも思ひ入まゴ為て居る遠と
振でゐるとう」「ヤアさのあの〳〵慌思しゐ七者ゴう此時お白湯の盃の
上へ茶碗を置ゴて行まり」「桜のお湯お致し生」「ヨト御ゴの
お人出せゴ」「茶碗を揉振をして手を振つてゴんゴうと
思ゴ何と振て遠して異ゴ為て出来ゴ」「オ〳〵振り返し生ん
ゴ」「ヨオイ面ゴけゴ呼て来ゴ」「受て付て来ゴるのゴ」「お白湯
さんの自己」「ゴの人情合ゴ為ゴのゴ」「ヲ起手情人ゴの人ゴの
お鬼湯さんゴ」「ヲ人ゴけまゴ」「去年の十月出雲の人達ゴ

自己と云白湯さんとの人割振不縁結びの文修へ記してあるのを
又て来たのを文ごろ〻今月八俗人で白湯日い遊廓不参不逢
俗人と極りを付て居るのをア「ヨヤ〻長右文ちやア私さの方
い何様思つて白世会るのを表「イヤ〻おおの名の
不ふ白自己の名が書て居ろ〻表入りと白情人不採拾て
个さる思ろ白和旦俗人「ヨットおおの名い手後字清心
塗て仕舞て自己の名を上人云書すろ〻ろ表さん
い自己の遊廓ふ逢人俗人と何ろ二人りい表湯の女不戒拾

てあろ元のうちふ後ろ追て〻ろ客ふかだてとかさ白ハ赤よその
麻机へつて一生ふ西人「時ふ三でさん改助と下を表のこ表
うち早く方すの湯汁を廻らして表だの「今廻らさうと
思つてあろさのちろ〻「不を未ご廻ら俗人うちふ門附どのご
でうけて〻ろと元のご落ちやア俗人ろト噂ろ麻机の侍へろを
ろ〻て荒ふ〻表ろ六十年アのおやちぶ元ろ「長右ア
論ふろと枝豆のヲうつて異さろ〻しやイおれふ表おふ盃
踊のヲ躍ろべろ〻表「茶ふ表かへてんぶごんぶの「今

湯と砂糖は甘ふ
ようそうかなるさんとも
こゝろをとかすの
ますます辻茶や
甲雄

茶の味

そこらの酒屋でやさしい女郎を買ふて一合ぶつかけへ〜こうこう屋敷
ふるまをまやらぶぢや　「おおあの美工うちふ盛ァ乃未上〜ことアあ
る　「おれらうこうこうこうこう中色師の天丼とのんざつこうこう子先男ガ
ぬかの声ガいく程ガ宜ざこうこうりんそんのかあどの中逃ガ曲ちんざとのん
ねざ　「さうざらうョ今ざらでせんやどりガさぶんそんるぶーちうこと
ーちうのおそうのとりの活梅るんざァあのくうキこのる新ざ〜
ちうざ爺さん寄曲のこうの盛ァやつことりガあろう爺〜書面
ざうでこういんざこんガ美こうこうこりんそんの涙ちる〜ガ麦細へ下り

こ行のヲ逃ことそ。イヤとりやア行とヨウ何級来こホウと云て何
ちうのあ所ぢ方ちう箸ちうんちやガ自己逃ふ曲て。イヤちうや行
どヨヲ何級来こホウこと云て何ちうと云て八町ぢ方ちう箸ちうう通楽
ちこのか林ふ眠つて花る赤尾ども逃ガ繋くちうちやガ〜
そのつァ活動ガ愛ざ曲ふ爺さん枝豆と論ちうあふ不弱で何
私ざりあるのざ　爺　「六回半ぢ中ちうすべ表　「ちやア
そのつと不弱買て老ちうう今夜ち高熱と昆ガちりと
ちて自己ふ度ちて度ちて異れ人ト云て六ケ敷ことと教むの

ちやア移人今ハ此処へ男連の門附が来るゝ〻門附を
おあが唯うんでト爺の耳へ口を寄何う類つゝハ私達ハ
懐中ゝゝ金を出し紙へ包こゝて親爺ハ渡せを取爺を
出上ハ点頭て「ハ〻〻ハテ自己ハ拵ハ居ハ此のヲ大路
ぢで味よく對詩を巻つて〻せやすべ云「其ぢやア爺
さんおあゝゝ方の腰へ付て離さて居ハ移人ぢやア
いろ移人爺「門附ゝゝが来ゝゝ桐屋のヲ物をまるぜん
「阪うんで居るよ「焼捨ハへ投りうんで裡の消食

ハも仕て仕舞ふと云拵ハ爺を引摺うんで彼が方ヲ廻
ゝの「彼拵ハ者可通ハ者ハ辞爺ハ門附を呼廻し
ゝて居ゝめハが「者可通の半辞ぢゝゝハ方の縄へ
向あのぢ夫ア恐て間色の居ハ身をゝんて垂て後れ手
和ハまるぶゝ「枝豆と淪和ハの居ゝゝ何と云
云ハ世人張ハ云百夫の所い居て居るゝゝ「オゝ
ハ義さん知ハと豆の大番拵ハ葬ハ張ハの居ゝゝ番湯
さんを誘て坐ヲ目張ハ来移ナ「ヲヤ移ゝゝハ白

湯さん「ゆえもうしさよう」「果い耳ぐ移人」「ふつつか」
夢ぐえもちやア我慢ぐ出来ぬ子「みつく思人を」
らつ〜移人「私さやア枝豆ぐ大好」赤「自己の繁盛を
負て八百投でも推拒めやうつ」「ヲホヽヽヽ」「安い給料を
捨ても仏ホも役ホに立ません移人」「役ホに立移人ア
い移人澤山食ぐ給料も腹も減て来らア」赤「時ホに表
さん豆改めておあホ情とぐ重ト出るア外でも移人情
合ホ取て美ひてんのごと咲とうおあぐ私ー動平

さんとうのまぶぐあるトりぐらうぐ手ー動平さんとうホまぶ
のドやまホるら移人のごろなぜるーうだ今ずだちやア移人此
次の世ホいろホ取て呉とうのごホ今ずホ取て呉ア
ずれ松みるりい移人のごぐホの目のホ松と表て曳を数ア
の表でうきんぐらーとうとうぐ見て死ーうとうとうと絡と
ちい移人のいこうちも永和ぐ立ぐ出ぐ変る
こんどの世ーうーうあのおぐらーいろホるつて来ーうと永
和ーてこれても置ぐらーう呉永和ーて呉ーうるーう此世

から都合をして置 後人けりやア ある後人と云のハ おお
が八十で死バ自己ハ七十三で死 おやが百で死バ自己ハ九
十三で死ると云のさ ところで其おやの死で外手を嗟て
置た人のごろうぜ あとの七年先へ死で七年先へ生れ
てみると自己が二十三ニなる時おやぐが十六になるところど
七ツ目で相性と云八年頃と云ふ分でも抜目のねへ塩
梅ができるといふのご其ニあつらへ次第やと坂東と
太田屋で茄雛と招て男ニ生ましおやハ大とやと音

胴屋ときてのくだで撰まりやア器量な女ニ生まして呉るハ
三人り並んでまてと云のハ桜ニ柳ニ桃ニ牡丹ニ若葉ニあめ
めニ杜若と云ふなくらし枝豆をとつて居て「ヨウく自己の
おむすさんをころして罪をうちたる縁ハ見ニあてもしまうぞ
此よどふろうニなつてもこんどの世ハおやぢにくらべるとよ
売さん其でハ後世ハおかみさんと縁合になりまするよ其
時のごろうけとも結納とも思つて一ぷくつけておくんなまし其の
「私きやア生れかわつて姚嫗のきてニ成り生まれる

時の[illegible]の御借ふ為ると思人[illegible]
「[illegible]」
紙ぐ ぢくあエ。アレ〳〵げこを抜ねて ねオドあやアぐる。ヲレく
ぢへさん[illegible]て わるくつちやアいけ[illegible]せ
「芋の畑[illegible]」
番ふ[illegible]やーてもてぐり迎で[illegible]ると[illegible]ぐ[illegible]も[illegible]ねへ
と思つて出てくるぐアそんぐうあれ[illegible]うえて[illegible]ると門
「ウソ」
[illegible]ぢらも誰も居[illegible]と思つてそぐそくるぐア
[illegible]と考[illegible]るへ[illegible]やーてもいけまど野[illegible]と門[illegible]を
[illegible]分の見分のやうぢでも思つてあやアぐらア
「アレくとう」

く[illegible]て仕[illegible]アぐつて
「ヲイく爺さん藤て仕[illegible]ちやア
いけ[illegible]と云ふよ[illegible]ア
「やまと分解れ」
「とまサ爺さん[illegible]の書[illegible]ものと一[illegible]ちやア遠人
ぐらう ぢやア[illegible]人う
「ハア遠人う子[illegible]ぢやア自己[illegible]え
[illegible]ぢでも[illegible]が[illegible]で十[illegible]門附が三味せんのう[illegible]
て来るぐ[illegible]三味線の三筋の糸のこと猫の皮の[illegible]乳の
[illegible]と掛合して三[illegible]十二と[illegible]十二
ぐう大げ[illegible]変りも[illegible]と思つてぢや
「分でも[illegible]」

起て居て其の後人ぢや程わ
「杉菌一株入ろと思
つるかのごとハア俺ハ家後人浮世ごアトもどりく起上
赤「ヤア爺さんおのの鍋ッ爺人抜ハと下駄が引掛ッて
居ると爺「道理で天窓がげんかに重いと思つた赤「エヽ
やア自己の下駄ぢやア後人の「何ぞ此処ハ脱て居てご
ぢやトまと上て鍋ハ掛ケ〳〵中駄を操「是大げ有ひが
する子臭い厨ぢや赤「臭へ筈ど自己が大の糞を垂ご
のごとのヲ「何のあごア小猫へ赤「エヽ是何故投て仕舞ん

ごイ「爺さんと縋て張の泊り心い臭抜とのハ何故
ら〻「自己いさんの爺さんの家を狙りと猫さやと
必つて夫後夫窓臭ごノ赤「天窓臭ハ自己を掻ちち何
抜智夫所の方ごら〻抜爺い大口を開て笑ひ居ると
「肚物ハらア何を云て居ることアクげんハ遅いがぢやト泥
くれり〻〻みッの殘ゴオシ引
美ハ赤改助と下を帝ハ赤八肚長七の三人ハ
別是夫ごハ支夜頭人家を主いご「下を云おの掻

亥旦ちゃア往ねえぜ　下「撥の亥旦と行へけりとど二味線
あの恐るる彼処の近所へ往まで　政「あの持て異行へう
夜ごめヲ揺うもうあるる　下「俗よ引義のげり　政「ヲヲト俗て
異んるの氏処考ふ某撥屋が丸こッけ声知業と異こと
りへのご　下「今陝ごうて今験ゆ　政「老生義湯を元
分て三杯とやこうこう大分間候の酒義が宜抜ご一番
間ってりやうう　下「夕書ると我ゆとこうこ二ッで行ようと云のご
こ張気ちゃア行へう　政「お義めを脇さ垂るのの宜が悪り

て張くもうこうと垂こう垂ふ女房ふ灰うあんのと云ゆア
云ゆう　下「お白湯湯ゆ自己の義をうと行へ抜ごちょのと
うこうこうの月分が可垂こうて灰行へコウ脇るとの抜ゆ出
みるのごと氏方が脇うこと義湯を一寸垂と何時のうふ
こう器を垂てごのと脇るのごこう。ヲ甘いと舌ふ垂るその
舌ふの子ふと垂つと奴が耳へ付て家へ帰ても垂て
びょうると云のの何抜ごうう　政「何れても垂ごさんごの
飛八ごの財垂ごのと云のの股の肉で脇脇ゆ脇ぶやける

ぢらう〳〵よ　下ル「老母角母連中うちぐ女ふ母ひぐく腹
らうとさとものゝのおあと自己平りぐらう　政「女とゝ
ものゝ女ーの面で見ひ分わ者ごとうとそそ山ろの晩　お麦
ぢが腹が痛へとゝゝゝゝ自己ぢが腹ハ痛ゝゝ者姉人ごさ
れとゝらう〳〵〳〵。ラヤく政さんゝ古風なるぢがおゝぢと
ゝゝる古風なるぢの姉ゝおゝ人ゝ者友伴式で寅がおり
ますヨとゝゝやアぢつぐぢ文ゝゝ世ゝ者ゝ腹りゝ来とやりぐ　下ル
何ゝゝゝ徐ゝ母掛ゝ冠ゝぢやア移人ゝ　政「遠人移人

ぢう本舞毫へゝるゝく旅ゝト見まり二人ゝ母拭冠ゝ下ル
帝ゝ二味線の調ゝおゝゝゝく〳〵と金毛ゝぐゝ　下ル「代位で宝
らうの政「丈ゝで者ゝるゝアぢ世ゝ言へ方ゝ宝　下ル「腹りゝゝ
者ゝてカンの面ゝ出ゝ拭へゝと移移人　政「我身ゝぐゝ小ゝ乳
ゝ者ゝぐよゝアゝ　下ル「代処ゝ〳〵〳〵ゝゝゝゝゝゝ拭ゝ拭ゝ中ゝぢやアれ人
ゝト推ゝ法ゝ母下ゝ帝ゝゝ二位の者人撥ゝ歩ゝ付ゝ
チリンツ　チリンツテレツテトウチン　チンツテトチチリツシヤンと弾ゝぐゝ
ゝ彼方ゝ者ゝ義湯ゝゝ毎ゝ者ゝ侍撥ゝ言ゝ長

次郎ゲ「肝良ク流ヒあの三味せんガ弁らしの世」
「遠人
移人あるまじく」
「別あが今移人とうえてうやく物音
ゲする
「ヨイ 爺さん」
「処へ三味せんを弾ヒ来さのゲ弁
しゃうゑ刻のヨヒョ」
「安心して居ようせ人ちゐッきり此
中下ち弟 政助い梅の弁の弟人来かり えると倩の腰
撫ル来次弟 作め皆居 坂下ち弟 此処ぞと反此ル
欲 チンチリチ チリンチ テンツテトツチ チンツテト今ヤリ ヨヤンと鑑
ク 麻机の傍へより通り かうを豆腐の親父いこ ぞと

大声で「ちりや 移どゆ工さうで移人三ヒ十二のうとづけやう此
ちん者て れさう せ人ト 歩人びつくり 政助い下ち弟ゲ
を ひう 張「ヨイく あのうくちのことを 肝 物ごとうて 唯やア
ゲうさせ
「そのうちちゆやアきゲーゲ さんゲこんを 撫るゲちう
ちまうず 向ち人 性ゲいく
「是りや 唯ちゆ 仏の 板ちんゲ
一ぢんうちうて れさう 世人門 附ち ちゆッきうどうやイ
「いう
移人せゲく
「ゆゆ世人さんい 唯ゲ 長れ人のゲ
「ヤア
今ゲのうさ奴ゲ 顔 ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ

うきよ引夜ぶね
川柳狂夢

七編人三下中 十五

下々郷と政助が名主の祖を繋り様人「主らふ代金を
やくそくくゝ何でも慣らの上長さうせんと義郷より張文を金
を政助ふ渡ーもり要併ふ疑ぎの情人ひいてきて「長者文
でも物円とくゝでも常和でも商無藩でも一ぢんうゝて
長さうせんおあらうがお義法で十日ぶ家生くゝうれのとうてあう
夏と五のウ六百文でうゝたくちうんぢゃうゝ或
私ちらのいお決ぶとらうて習慣とうて文字すのとぢぎ
います「そんぢゝ案文を慣くぶ上うんべ家せんぢゝ

形度の孫十兄イでせん慣くふうゝを笠ふ慣人孫人ちう多
い云うんべ家文とも上ア案文も慣人孫人ちうるのゝ笠松
峠の鬼神のお松ゝ云い義候まゝ上へんよ張木を知と
い人武士がちう贅女の坊弟でも慣くゝ宜うゝ「
工夫モレ具招我ち笠のゝ業慣くゝ人ので一寸くと
ちゝふ云ゝ家ゝ縫けゝ半り慣くゝ人のでも食人字すへ
文んぢゝゝでハア恥爺張義ア文笠ぶ さアらひとゝ云のぶ宜
うんぢゝ「工具招文書ふ係ゆゝ俵ぬと

りんのを一番唄ひやせう「ちゃら坊ぞく」そなたさア
お衣装へソタ番ちうと我れと思へを大り〜馬のあちう
と様々様山茶花水仙柱杷の花ちう咲きさア唄こう
ヲいお衣装へ自己ゑ地の悪いことをそどけ是ど悪のと
亘さア六百ど慶らんぐちうう大悪ぐ悪ぐちゃく〜名番
成るけつや我色成れぞと亘慶の祝爺ホ法ちうちの
用ろ下を弟敗助を脇ホうんを張ろ表弟赤へ時を
の文い袖を引張膝を法ッ突「何板ぐく自己の方す

いちらいんぐちう赤「ちゃく〜甘く廻ってのう時代「アちく表
あと亘を六百ど慶ってのを赤を示ちやアぐってぜ赤「エ、
自己があまれど長吹ってをってのホチョッ敗まってあん多
ヲを長やアぐる赤「十三茅畑ど粉の番と表畑ど丁の番
とさーちやア自己切名を柄のう薬〜ってんぐアホ矢
番ちうと我れあちうの番ホ雇亘を換れってと云れちゃア
あとあと亘のう慶ってと六百矢の色ってのんホホ海粉人ぐど
よ。ちゃいけ粉へ〜陸と化を薬〜ちうぐイ赤「この川ア

笠下をこ跨ぎが逃げさイ流「イヤアこりゃ」く向ふの屋
代り人垂人突掛へ夫アがつて「ヨヤく野郎が逃げ来る
表「こりつア面ぢ」「ぢく」あとヤア下をめぐ捲んぢる
面白く〳〵と三人りい笑壺ゑ入ふ

七偏人三編巻之中終